様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７３０７６９

研究課題名（和文）ポスト近代における「自律」と「啓蒙」の再評価―フロイト社会思想の教育学的検討―

研究課題名（英文）A reevaluation of 'autonomy' and 'enlightenment' in post-modern society: educational theory and Freud's social thought

研究代表者
下司　晶（GESHI, Akira）

日本大学・文理学部・准教授

研究者番号：００４０１７８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,600,000円、（間接経費）　480,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ポスト近代社会において目指すべき教育のあり方を以下の観点から検討した。

(１)フロイトおよび精神分析における社会理論の検討　―自律・啓蒙・「甘え」―　(２)教育学へのポストモダニズムの影響（３)学校教育および教員養成の目標としての自律と啓蒙の再評価
自律と啓蒙という近代的理念は、ポストモダン思想によって批判されたとはいえ、教育にとって今後も重要な原則であり続けるだろう。

研究成果の概要（英文）：This research examined the aims of the education in post-modern society from the following viewpoint.
(1) an examination of the social theories of Sigmund Freud and psychoanalytical studies; autonomy, enlightenment, and "amae" (psychological dependence)　(2) an examination of the influence of the post-modernism in educational studies in Japan　(3) a reevaluation of autonomy and enlightenment as the aim of school education and the teacher training
Although modern ideas of enlightenment and autonomy were criticized by the post-modern thoughts, they will continue to be extremely important role for education.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：教育哲学　教育思想史　ポストモダン　フロイト

１．研究開始当初の背景

1990 年代にポストモダン思想を受容したことによって、近年の教育学では、理想や理念が語りにくい状況にある。ポストモダン思想によって教育学は、多元的価値を認める方向へと転換した。しかしその副産物として、教育目的は価値相対主義によって空洞化し、シニシズムに帰結したともいわれる。以上が研究開始当初の背景である。

２．研究の目的

そこで本研究では、ポスト近代社会において目指すべき教育のあり方を、個人の人間形成と、社会集団のあり方の両面から提示することを目的とする。なかでも、自律と啓蒙という教育学の古典的な主題を再評価することが、重要な課題となる。これらの近代的理念は、ポストモダン思想による批判によって大打撃を受けたが、それを踏まえた上でなお、今日の目指すべき理念となりうると思われる。

３．研究の方法

大きく分けて３つの主題に沿って、研究を進めてきた。

(1)フロイト思想と精神分析学派に関する教育哲学的・教育思想史的研究

第一の、もっとも中心的な課題は、Ｓ・フロイトと精神分析に関する教育哲学的・教育思想史的研究である。フロイトと精神分析は、20 世紀以降の教育に大きな影響を与えたといわれるが、従来の教育学研究では十分に論じられてこなかった。

(2)教育学のポストモダン思想受容の検討

第二の課題は、教育哲学・教育思想史のメタ批評ともいうべき研究である。特に、教育学のポストモダン思想受容に関して、学会誌の分析等を通して検討してきた。

(3)教員養成・教育実践における自律と啓蒙の再評価

第三に、自律と啓蒙という教育学の古典的な主題を、学校教育現場や教員養成の課題に即して再評価してきた。その際、教育哲学・教育思想史の立場から行う文献の検討だけでなく、学生に対する質問紙調査などの手法も用いてきた。

４．研究成果

以下に研究成果の概要をまとめる。

(1)フロイト思想と精神分析学派の教育哲学的・教育思想史的研究

Ｓ・フロイト思想と精神分析諸学派を対象に、「自律」「啓蒙」といった近代的理念との関係を問うてきた。特に、精神分析が有する啓蒙的性格に関しては、晩年の著作「人間モーセと一神教」の読解や、同化ユダヤ人としてのフロイトのアイデンティティとの関連から研究を進めてきた（下記論文５）。また、精神分析の日本的受容に関して、土居健郎の「甘え」理論を例に、個人の発達と社会の発展と関係から検討を進めてきた（下記論文６）。この課題は、教育学における「自律」概念の再検討にも連なるものである。（下記論文３）。

また、これまでフロイトを対象としてすすめてきた心理学を対象とする教育思想史検討は、(2)の教育学の歩みを検討する研究とも合流し、戦後教育学のピアジェ受容を問う論文に結実した（下記図書３）。

(2)教育学のポストモダン思想受容の検討

第二の成果は、教育哲学・教育思想史のメタ批評ともいうべき研究である。教育哲学会・教育思想史学会を中心とした学会誌の動向を分析し、ポストモダン思想の受容のあり方を検討した。具体的な成果としては、近年の教育思想史研究が、教育哲学／教育史／教育人間学と一定の距離を保ちつつ、ポストモダン思想を受容しながらその手法を明確にしていった点を検討した（下記論文７）。また、教育哲学のポストモダニズム受容に関して、従来は否定的側面ばかりが語られていたが、実際には、それによって研究手法が精緻化されたこと、また教育哲学の規範創出機能は失われていないことを論じた（下記論文４，図書２）。

さらに、教育学がポストモダン思想を受容することによって、教育哲学と教育実践の関係にどのような転換が起きたのかを分析した（下記論文１）。

(3)教員養成・教育実践における自律と啓蒙の再評価

自律と啓蒙という教育学の古典的な主題を、学校教育現場や教員養成の課題に即して再評価してきた。その際、教育哲学・教育思想史の立場から行う文献の検討だけでなく、学生に対する質問紙調査などの手法をも用いてきた（下記論文８）。また、中央教育審議会答申を分析し、今後の教員養成のあり方に提言を行った（下記論文２）。教員養成に関する研究は、図書（共著）としても出版予定である（下記図書１）。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）

1. 下司 晶 2014「見失われた啓蒙のゆくえ ― 教育哲学と教育実践、その関係性の転換 ―」『教育哲学研究』109 号, 2014 年 5 月. （査読あり）
2. 小笠原喜康・関川悦雄・渡部 淳・下司 晶・末冨 芳・北野秋男「中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」を読む」『教育学雑誌』(日本大学教育学会), 第 48 号, 2013 年 3 月, 45-71, 執筆部分　下司 晶「「学び続ける教師像」の現実化のために―― 生涯学習社会と理論-実践問題」pp.56-60. （査読あり）
3. 関根宏朗・尾崎博美・小山裕樹・櫻井歓・宮寺晃夫・下司 晶「教育学的「自律」概念の再検討」『近代教育フォーラム』(教育思想史学会),第 21 号, 2012 年 10 月, pp.209-221,執筆部分　下司 晶「関係論的自律概念は近代批判を超えるか？」pp.220-221. （査読なし）
4. 下司 晶「ポストモダニズムの大いなる遺産」『教育哲学研究』(教育哲学会),106 号, 2012 年, 24-25. （査読あり）
5. 下司 晶「フロイト／ユダヤ／啓蒙――精神分析の科学的世界観に寄せて」『教育学雑誌』(日本大学教育学会), 46 号, 2011 年, 107-120. （査読あり）
6. 櫻井 歓・下司 晶・須川公央・関根宏朗「「甘え」の比較人間形成論――土居理論と教育現実のあいだ」『近代教育フォーラム』(教育思想史学会), 20 号, 2011 年, 195-206. （査読なし）
7. 下司 晶 「言語論的転回以後の教育思想史――あるいは、ポストモダニズムの何がいけないのか？」『近代教育フォーラム』(教育思想史学会), 20 号, 2011 年, 171-181. （査読あり）
8. 下司 晶・木村拓也・奥泉敦司「実践とし

ての理論、あるいは教育哲学の代替不可能性　――教員養成における教育哲学の有用性に関する調査研究(３)まとめと提言」『教育哲学研究』(教育哲学会),103号, 2011 年, 92-99.（査読あり）

〔学会発表〕（計４件）

1. 下司 晶・小野文生・奥野佐矢子「教育実践と教育哲学　－これまでの教育哲学、これからの教育学(3)」教育哲学会第 56 回大会・課題研究，於 神戸親和女子大学，2013 年 10 月 13 日
2. 下司 晶・白銀夏樹・辻敦子・須川公央・森田尚人・森田伸子・今井康雄・綾井桜子「教育思想史の課題と方法・再論　―森田尚人・森田伸子編『教育思想史で読む現代教育』を手がかりに」教育思想史学会第 23 回大会コロキウム 1，於 慶應義塾大学三田キャンパス， 2013 年 9 月 15 日
3. 小笠原喜康・関川悦雄・渡部 淳・下司 晶・末冨 芳・北野秋男「中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」を読む」日本大学教育学会，2012 年度秋季大会シンポジウム，於日本大学文理学部，2012 年 12 月 8 日.
4. 関根宏朗・下司 晶・尾崎博美・小山裕樹・櫻井歓・宮寺晃夫「教育学的「自律」概念の再検討」教育思想史学会第 21 回大会コロキウム３，於日本大学文理学部，2011 年 9 月 19 日

〔図書〕（計３件）

1. 林泰成・山名淳・下司 晶・古屋恵太 2014(近刊)『教員養成と教育哲学』東信堂.（査読なし）
2. 広田照幸・宮寺晃夫編 2014(近刊)『教育と社会との関係の理論的研究』世織書房, 執筆部分 下司 晶「ポストモダニズムと規範の喪失？――教育哲学のポストモダン思想受容」.（査読あり）
3. 森田尚人・森田伸子編『教育思想史で読む現代教育』勁草書房, 2013 年 3 月，執筆部分： 下司 晶「発達―戦後教育学のピアジェ受容」307-29.（査読なし）

６．研究組織

(1)研究代表者

下司 晶　(GESHI, Akira)
日本大学・文理学部・准教授
研究者番号：00401787